

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370460

研究課題名(和文)教科書コーパスと作文コーパスとのリレーション解析による言語教育の影響と授業開発

研究課題名(英文)Classification analysis of text corpus and essay corpus and influence of language education by lesson development

研究代表者

鈴木 一史(suzuki, kazufumi)

茨城大学・教育学部・准教授

研究者番号：30635610

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：教科書の語彙と学習者が使う語彙との関係を分析した。また、よく使われる言葉との関係を分析した。その結果、作文コンクール受賞作品では、1つの作品に様々な語彙の関係が見つかった。また、接続表現などが有効に使用されていることが分かった。さらに、国語以外の科目に現れる用語については、教科書教材は専門用語や論理語彙に大きな影響を与えるが、一般的な用語は一般書籍と大きく関連していることも分かった。そして、教科書教材の語彙脚注は系統性を示さなかった。それらの結果を受けて、教授法の開発、特に語彙の語学教育に焦点を当てたところ、学習者の活動が活性化された。

研究成果の概要(英文)：I studied the relationship between the vocabulary of the textbook and the vocabulary used by the learner. We also analyzed relationships with commonly used words. As a result, in the competition contest award winning work, a variety of vocabulary relations were found in one work. Also, it proved that connection expressions etc are effectively used. Also, for terms that appear in subjects other than national languages, textbook teaching materials have a great influence on technical terms and logical vocabulary, but general terms are largely related to general books. Also, vocabulary footnotes of textbook teaching materials did not show systematicity. As a result, the activities of the students were activated, focusing on the development of teaching methods, especially language learning of vocabulary.

研究分野：国語科教育学

キーワード：コーパス 国語教育 授業開発 接続表現 学習語彙

1. 研究開始当初の背景

平成 20 年告示の学習指導要領において各教科で言語活動を充実させることが明示された。言語力(国語力)については、平成 16 年の文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」で提言されたように、その中核には語彙力があると考えられることができる。したがって、語彙の教育を通して言語活動を充実させる工夫を行うことは、学力の向上に資することが期待できる。

これらの指針や提言が、言語活動と語彙に注目して学力の向上を図ろうとしているのにもかかわらず、現在の教育現場では言語活動と語彙とが関連付けて取り上げられることは意外と少ない。語彙の重要性が認識されていながら、現場で取り上げられることが少ないのは、次の二つの理由によるのではないか。

(1)取り上げるべき語彙が膨大でその全体像がとらえにくい

(2)教室で語彙を扱う際に必要な教材・資料・指導モデルが乏しい

このような問題意識から、平成 17 年度から 22 年度の文部科学省特定領域研究「代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築:21 世紀の日本語研究の基盤整備(領域代表者:前川喜久雄(国立国語研究所教授)通称「日本語コーパス」)において、「言語政策班」に所属し、「言語政策に役立つ、コーパスを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用」(研究代表者:田中牧郎)の研究を行ってきた。

コーパスとは、ある言語の縮図となるように言語資料を体系的に収集し言語研究に自在に活用できるようにしたものであるが、上記の特定領域研究「日本語コーパス」では、社会一般の書き言葉を代表できる書籍・新聞・雑誌等の 1 億語規模のコーパスが構築され、「言語政策班」では小学校・中学校・高等学校の全教科を対象とした「教科書コーパス」を作成し、教科書の語彙と社会一般の書き言葉の語彙とが比較対照できる「学校・社会対照語彙表」を完成させた。これらの成果によって、教科書の語彙の全体が把握でき、それが社会一般の語彙の中でどのような位置を占めているかを明確にすることができるようになった。

そこで問題となるのが(2)の現実の教育現場での指導である。このことを解決するためには、学習者の言語使用の実態と、教科書教材や教科書語彙の実態と、国語科教育の実態である。そのために、応募者は今まで中等教育学校の生徒を対象にした作文分析を行ってきた。2008 年度第 3 回博報「ことばと教育」研究助成によって、生徒作文の収集と語種分析を行うことができた。前勤務校は中等教育学校であり 6 年間一貫の教育を行っているため、利点を生かして、生徒の作文をデータベース化して分析することにより、学習者の語彙発達の特徴を調査した。中等教育 1

年から 5 年まで、すべての学年に同様の課題を課して、作文を書かせデータベース化を行った。この作文は、全文検索ソフト「ひまわり」で検索できるようにし、品詞情報だけでなく、表記の揺れや語彙の広がりや共起語などを調べることで可能にした。

2. 研究の目的

母語話者に対する言語教育という視点から、教科書を中心とした教育の影響と使用言語発達のプロセスとを明らかにし、国語科教育を含むすべての教科にわたる学習プログラムの可能性を志向する。学習者の使用語彙については近年多くの知見が積み重ねられ、言語発達の段階が明らかになりつつある。その発達について、国語教育という立場から検証し、教科書を中心とした教育の影響の大きさや範囲を特定することが本研究の主要な目的である。第二の目的は、その研究成果を踏まえて、実際の国語科教育法を中心として、授業プログラムを構築することである。他教科も念頭に入れた横断的言語指導・言語活動プログラムを組むことが可能となるため、研究成果の発信性として、汎用性の大きなものとなる。最終的に、「作文コーパス」を作成し、生徒の作文における語彙リストを作成した。頻度や品詞情報などを付与することにより、どのような言葉を使って生徒が表現しているのかをリストとして見える形にした。成果として、語種の変化などが見えてきた。(2008 年度第 3 回博報「ことばと教育」研究助成研究成果報告)具体的には、延べ語数に対する語種の頻度をパーセントで集計。外来語、漢語は 1 年から 5 年に行くにしたがって頻度は多くなる。反対に、記号、和語は 1 年から 5 年に行くにしたがって頻度が低くなる。このことは語彙密度が高くなっていることを表しており、同じ字数であれば、内容の濃い文章を書けるようになってきている。6 年の要旨集に至っては、漢語が全体の 20%以上も占めており、小論文としての内容になってきていることを示している。この段階では、分析の観点がまだ整備されていなかったため、以上のような分析にとどまっている。しかし、「日本語均衡コーパス」が完成し、その作成過程で、レベル分けなどを盛り込んで制作したために、生徒作文の分析においてもそれが可能になってきている。

具体的に指導方法の開発に関しては、昨年度「教科書コーパスを用いた言語活動を引き起こす教材開発と授業プログラム」(奨励研究課題番号 23908019)において、教科書コーパスを教材分析に使うことで、「羅生門」の授業プログラムを再読という手法と重ねて開発した。そこでは以下のような授業プログラムを組み、学習者自身の記述から学習者の読みの深まりが把握された。

: 単元 語彙に着目した小説の読み方、学び方

: 学習目標 ・自分の読みを見直し、新たな視点による小説の読み方を獲得する。・細

部や叙述にこだわることで、情動的な読みから解放される。・他者との交流により、自己の読み方の変容と他者の読みを受容する。

：指導計画 (1)「羅生門」の読みの振り返りと語彙のニュアンスについて (2)語彙で読むことについて、下人と老婆に使われている動詞と形容詞を分析する。(3)類語辞典などを使って、表現されている語彙のニュアンスを読み取り、下人と老婆の人物描写に迫る。(4)読みの変容を確認し、自分の読みがどう変わったかについて意見交換をする。

：本時の学習目標・下人と老婆の描写に使われている表現について、ことばのニュアンスを考えることができる。「羅生門」を読む読者はどのように読めてしまうのかについて考える手段として、ことばの使用方法を知る。・いくつかのことばについて積極的に自分で考えようとしている。

：生徒所見・一度読んだことがある。・多様な読みの方法を身につけてはいない。・小説について積極的に読もうとする生徒と、小説の読みを苦手と感じている生徒がいる。

：教材について・4年生、国語総合の教科書教材・多様な読みを可能にする教材・研究実践が多く行われている教材

このような経緯を踏まえ、課題は二つに絞られる。一つは、学習者の語彙発達と教科書教材との関連性。もう一つは、実際の学習プログラムにおける反応の分析である。

本研究の学術的な特徴は、今までになかった日本語コーパスを用いて学習者の語彙発達および教材の語彙との関連性を数値的に明らかにできるところである。国語科教育が学習者の言語能力に影響を及ぼしていることは予想の範囲であるが、問題はそれがどの領域に影響が色濃く出ているかを特定し、ひいては他教科との関係性まで明確になるところにある。研究の途上ではあるが、現在教科書語彙の特徴度の相関を調べ、社会科と芸術科の関係性や理科と技術科の関係性が統計的に有意に強く出ていることがわかってきつつある。このようなことを、教育関係者に広く成果として発信することで、教科横断的な言語活動が創造される。このことは、本研究の汎用性を示しており、今まで教科横断としての語彙という観点が希薄であった弊害も取り除かれると考えている。

3. 研究の方法

目的を達成させるために、生徒の語彙分析と教科書教材の語彙分析とその関係性をそれぞれ順番に行う必要がある。今まで行ってきた研究やデータを踏まえたとしても、ここまで行うのに一年かかる。その後、分析された結果から、各教材の授業プログラムとその成果と分析を行う。最終的には、教材指導事例集を作成し、分析語彙とともに広く現場の教員の実践の観点にさらし、実用性を問う。

- (1) 教科書と学習者のデータベースを作成。学習者の作文分析では一定の研究成果を出してきた。その手法をもとに、さらにデータを増やすことで、発達段階や一般性について厳密化する。教科書コーパスを「言語政策班」で作成してきた。それを援用する。
- (2) 上記と のデータベースをリレーションさせることで、学習者の使用語彙に対する教科書教材を中心とした教育の影響を分析する。影響があることは自明であるが、どの教科のどの部分が学習者の記述に対して影響があり、影響の強弱はどこで決まるのかについての分析が可能である。
- (3) 具体的な教材一つ一つに対しての分析結果の照合とプログラム開発を行う。具体的には小学校で、低学年・中学年・高学年、中学校で入門期として1年生、発展期としての3年生、高等学校の必修として国語総合の高校1年生、それぞれの代表的な教科書教材に対する授業プログラムを開発する。
- (4) 開発した授業プログラムに対する評価として、実際の授業に資するかどうかについて、現場の先生の知見をいただく。実際の授業で行えるものは行ってもらい、数値として出せる結果の評価を設定する。現在の勤務校である教育学部の学生に対しても同様の調査をし、模擬授業としても成果が確認できる。
- (5) 教育の先生方が多く集まる研究会で、実際に授業分析と授業方法を行うことによって、授業プログラムの有用性を検証する。そのために、日本国語教育学会全国大会でワークショップを開いて、より多くの教員に言語活動や分析結果を知ってもらうとともに、教員の知見を反映させたより良い学習プログラムを作成する。
- (6) 学習者の漢字能力については、解釈学会等の学会が先駆的であり、中国での大会を見据えながら研究を行い、そこでの討議を重ねつつ、語彙教育の一つとして漢字の視点を取り入れた分析を行う。

4. 研究成果

上記研究方法の(1)から(6)の研究方法に基づき研究を進め、その成果を以下の研究論文・研究発表・書籍にて開示・公開してきた。

- (1) 作文コーパスについては、作文コンクール入賞作品のデータ化を行った。茨城県内の優秀作品集であり、データとして整っている。
- (2) 小・中学校の教員の研究会を立ち上げ、それぞれの学年や校種に合わせた授業プログラムを開発検討した。
- (3) 教員養成系大学学生に、教員になったときの模擬授業として、開発したプログラムを実施した。
- (4) 日本国語教育学会を中心に、教育現場の

- 先生方の意見を聞きつつ、実践プログラムについて議論した。
- (5) 中国南京で行われた国際学会において、言語環境という視点で教科書や一般書籍の言語データとしてのコーパスを検討した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

鈴木一史 『国語教育における知識・技能の育成の観点』教育科学国語教育 明治図書 58/ 11, 16-19 2016.11.01 査読無

鈴木一史 『新概念を表す際の用語選択問題—再生医療関連語彙に関する教育的課題—』解釈 解釈学会 62/ 5・6, 2-11 2016.06.01 査読有

鈴木一史 『授業に引き込む導入の工夫—授業の質的变化と課題設定の要素—』教育科学国語教育 57/ 12, 4-8 2015.12.01 査読無

鈴木一史 『作文コンクール入賞作品の文体特徴—小平作文コンクールの語彙素解析をもとに—』解釈 61/ 5.6, 2-11 2015.06.01 査読無

鈴木一史 開田晃央 『協働的学習による説明文章読解の授業開発——『オカミを見る目』の対比表現較読みを中心として』茨城大学教育実践研究 33, 33-47 2014.11.30 査読無

鈴木一史 『作文の中の接続表現』解釈 60/ 5・6, 54-61 2014.06.01 査読有

〔学会発表〕(計 5 件)

鈴木一史 『アンケートから見る教師の意識』日本国語教育学会茨城支部地区研究会 2016.02.06 「茨城大学(茨城県・水戸市)」

鈴木一史 『作文コンクール入賞作品の文体特徴—小平記念作文を中心に—』日本国語教育学会 茨城支部地区研究会 2015.02.07 「茨城大学(茨城県・水戸市)」

鈴木一史 『作文コンクール入賞作品の文体特徴』全国大学国語教育学会 2014.11.09 「筑波大学(茨城県 つくば市)」

鈴木一史 『漢字学習と言語環境の関係性』日中言語・文化研究国際学術共同シンポジウム 2014.08.04 「南京大学(中国南京市)」

鈴木一史 『ことば同士の関係性』～ collocation in corpus ～ 日本国語教育学会茨城支部地区研究会 2014.02.08 「茨城大学(茨城県・水戸市)」

〔図書〕(計 3 件)

鈴木一史 他 言語活動アイデア事典

授業づくり研究会 明治図書 2016.03
鈴木一史 他 講座 『日本語コーパス 4 コーパスと国語教育』朝倉書店 2015.1
鈴木一史 『授業を変える課題提示と発問の工夫 3 9』明治図書 2015.09

〔産業財産権〕

なし

○出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木一史 (KAZUFUMI SUZUKI)
茨城大学・教育学部・准教授
研究者番号：30635610

(2)研究分担者
無し

(3)連携研究者
無し

(4)研究協力者
無し